



千代田下駄告條

開帳

元大阪町も其昔金坐小隣なる栞旨の  
 把小して今も老舗を軒を連ぬし。その中程へ  
 開店せし。千代田下駄と名唱せし。高尚なる  
 考ふも多、漆桶と新秋も実を素人の商  
 匠を成し。士族の洗面法と云ふ流晒しあらうて。  
 勉強と云ふ二字を暖簾に最上公す。より  
 二階より方、川好くは方でも足以上、日本橋と  
 常橋の友区も、邸刻四番甲。又十屋以上六  
 市内へ配達遠慮あり。其は用を達其外  
 柳巷蒸街しも、日々下推をとりたる。下も  
 下駄の裏面を。雷の僕印なり。夫を何車  
 をみせて。ちほやちほ。つむくを。をりし  
 貝探あり。千代も八千代も相変らぬ。此の  
 有て来し。も。当町の老舗の内へ。宿を並ぶ。  
 株ふある。よふ真高の。と。公。之。水。号。より。因。主。人。と  
 考ぐ。本龍を採く。程遠らぬ。明治生まて  
 外。柴。其。水。記。

千代田下駄

本堂の函入の御製江川

此の月 日 責

東本市日本橋通  
 元大阪町十三分代

千代田下駄資資元  
 真高の商店

放水鳥渡橋。この調子主人が注意ふ。其の衣紋竹合。い。露。さ。入。糸。糸。小。の。

柳巷蒸街  
 後し

